# 松波むかし語り ―ここに住み続けて その 11

今回のお客様

**松波最高齢のおばあちゃんは気さくな博多っ子**

## 鈴木　三子（みね）さん　104 歳　4 丁目

***“私は、松波に来てから一度もお腹をこわしたことがないの。くよくよしないからかしら？”***

“生来ズボラ”だなんて、どうしてどうして。博多のお嬢さんの気骨と、明治の女性のもつ前向きな明るさがあふれてます。

松波では最高齢の鈴木三子さんは遠く明治 38 年に九州博多で生まれ育ち、結婚後、昭和 20 年にご主人の勤務地であった長崎市で原爆被爆という大変な時代をくぐり抜けたあと、ご主人の実家の四街道に移り住みました。

松波に移られたキッカケは？　「何かの用事が済んで西千葉駅に下りた時、“売家１３万円也、２間あり”という貼紙を見ました。値段の交渉を繰り返して、山口自転車をおまけに付けて１３万円ということで決まりました。私は決断が早い方でポンと現金で買ってしまいました。出張から帰った主人にひどく叱られました。実はその後、日当たりが良くて明るい土地が気に入った主人は近くに２軒目を買いました、おかしいですね」。

住み心地はどうでしたか？「川幡商店、佐藤八百屋、豆腐屋さんは生活の台所でした。近くに松波湯があって助かりましたが芋を洗うような銭湯で汚い湯でしたよ。のちに念願の風呂を持てるようになった時は本当に嬉しかった」。そうでしたね、私たちドロンコの子供が皆で行きましたもの。銭湯はいろんな話が聞けるところで富士山の絵も懐かしいです。

大変お丈夫のようですが小さい時からですか？「小さい時からいやしくて何でも食べました。松波に来てから一度もお腹をこわしたことがありません」。

長生きしてこられたみねさんですが、普段心がけていることがありますか？「チフスと長崎の原爆被爆で私は２度死に掛けましたから、どうして長生きしてきたのか不思議なんです。その時は郊外の日見トンネル近くの山地に疎開していましたが、後に自宅に帰って見た光景に言葉を失いました。私はズボラですが、くよくよしないで明るい気持ちでいること、敵を作らないようにすると気持ちよくお付き合いも出来るのではないでしょうか」。

昭和の激動の時代はみねさんにとって辛いことや苦労も多かったこと、でもいつも前を向いて賢く生活してこられた気骨ある女性の姿がお話の中から伝わってきます。そして今は「とても楽しく過ごしています。主人が亡くなってから家族の応援に感謝、特に孫娘は洗濯がとても上手で助かります。白雲館には２週に一度お世話になっていますが、おしゃべりもカレンダー作りも楽しく、焼いもやお汁粉のおやつがうれしいの。お昼ごはんは味付けがとても上手でいつも全部いただきます、根がいやしいから」とアハハと笑う表情は何と若々しいこと。

松波は住み良い町ですか？「ええ、道路の電灯が明るいのが良いです。昔は暗くてね、二軒長屋がギッシリ並んでいて泥棒が逃げ込んだら絶対分からないと言われていましたもの」。

編物が好き、歌は黒田節が好き、にぎやかなのが好き、冗談言って笑うのが好き、初めての人と話すのが好きなみねさんはこの３月に満 105 歳の誕生日を迎えます。松波の宝物です。お元気でお暮らしください。